

くすり プロムナード

長崎国際大学 薬学部 薬学科 薬品資源学
教授 正山 征洋



図1 セイロンケイヒの形態

現在では簡単に入手できるスパイスであるが、冷蔵庫等の保存方法がない15～17世紀には、肉やその製品の保存にスパイスは必須で桂皮をはじめナツメグ、ペパー、チョウジ等を巡ってスパイス戦争と呼ばれる状況が続き、ヨーロッパ諸国はこぞってスパイスの獲得に鎧を削った。

本画は、1800年末にカーラーにより描かれたセイロンケイヒである。カーラーの画は極めて精密に描かれていることから、生薬の講義に生薬標本とともに広く供覧されてきた。

正山 征洋 所蔵

日本薬局方にはケイヒ *Cinnamomum cassia* Blume が規定されている。*C. cassia* はトンキンニッケイ (東京肉桂) と呼ばれてきたもので、クスノキ科に属する常緑性の高木で、葉は長く楕円形、革質で互生する。初夏に、図1に見られるような白緑色の小さな花を多数開き、後に果実が黒熟する。学名の *Cinnamomum* はギリシャ語の *cinein* (巻く) と *amomos* (申し分ない) に由来しており、桂皮の形態と香りの良いことを表している。また、*cassia* は香りの良い意である。なお、桂皮は樹皮または周皮の一部を除いたものである。*Cinnamomum* 属植物には *C. cassia* (図2) の他にセイロンケイヒ *C. verum* (= *C. zeylanicum*、図1)、ジャワニッケイ *C. burmannii* 等がある。桂皮は漢方薬 294 処方中約 32% の処方に配合される重要な生薬であるが¹⁾、年間の輸入量 1,500～2,000 トンのうち薬用は 15% の 300 トン程度である。なお、上記のセイロンケイヒやジャワニッケイは香辛料として用いられている。

桂皮は神農本草経の上薬に収載され、脾胃を温め、風寒を散らす、血脈を通す効果があると説かれている。漢方処方では頭痛、発熱、のぼせ、身体疼痛などを目的に、桂枝湯に代表される多くの処方に配合される要薬で、桂枝湯 (桂皮、芍薬、大棗、甘草、生姜) を中心として種々生薬が配合され、適応がさまざまな方向へ展開している。

桂枝湯は本来虚証気味で汗が出ている風邪のときの適用が多いが、さらに葛根を加えた桂枝加葛根湯は体力が低

下気味で、汗が出ていて頭痛や肩こりがある風邪の諸症状に投与されることが多い。

一方、桂枝湯に芍薬を増量した桂枝加芍薬湯は腹痛や腹部膨満感等に適用であり、芍薬と膠飴を加えた小建中湯は、特に子供の精神的な胃腸障害等に用いられる。

冷えがある神経痛や関節炎等の痛みに対しては附子と朮が配合された桂枝加朮附湯、さらに茯苓が加えられた桂枝加苓朮附湯が機能する。

冷えが強く痛みも感じる場合は、体を温める働きを持つ当帰や呉茱萸を配した当帰四逆加呉茱萸生姜湯の出番である。

また、精神的にまいって不眠等を訴える場合は桂枝加竜骨牡蛎湯が適用となる。一方では小柴胡湯との合方である柴胡桂枝湯となり微熱が続いて長引く風邪や精神的な面への適応と方向を変えている。

図2 最高級品と言われるベトナム産桂皮 (*C. cassia*)



